

昭和46年2月御在所岳氷雪トレーニング事故

活動概要

探検部技術研究会春期トレーニングとして2月26日より、3月1日迄、鈴鹿山脈御在所岳藤内沢周辺にて氷雪トレーニングを行う計画であった。

事故発生日時及び場所

昭和46年2月28日午前11時30分。御在所岳藤内壁前尾根側壁ルンゼ。

事故発生状況

2月28日、前日来の陽気で藤内沢の氷雪がやゝゆるみ、この日は2パーティに別れ、上記前尾根側壁ルンゼを登行した。このうち上流壁に取りついたパーティの先頭の会員が、ルンゼの核心部を通過後スリップし確保した会員が負傷をした。

負傷者の氏名と負傷程度

三星善業（工学部2回生）

大阪府吹田市上山手町16-22 西野様方

前頭部裂傷全治2週間

研究

1. 沢登りと装備

小野竜弥

こゝに言う沢とは黒部川の支流に見るようなビヴァークを何日も続けるような重装備のものを対象とし、装備を中心として沢登りにおける生活を述べようと思う。尚○○沢○○壁のような積極的に人工登攀を駆使するものは沢登りの範囲に含めていないし、また技術のことには多くはふれていない。

1. 共同装備

1-1 生活用具

a テント

沢登りにおける標準的なパーティは2～4人が適当であり、こ

れ以上のメンバーならばパーティを分けてしまう方が敏速な行動がとれる。よほど天候に確信がもて、安全な避難ルートを得られるのでなければ沢の中でもたついていてはいけないからだ。又、雨中、雨後には鉄砲水が支流や本流から襲うことも心配だし増水も不安であるから幕営地の選定には大変な神経を使うことになる。源流地帯に達するまで沢登りとは気苦労の連続である。

さて、最も軽量に携行するならツェルトであるが、居住性を考えるならばビニロン薄手のテントを持って行くべきである。但し、支柱その他の附属品は不要であり、立木や岩を利用して張網を渡せる場合が多い。そのため張網は細引と兼用としてナイロン3mm×20mぐらいのを持って行く。

グランドシートはビニールシートの四すみを補強しておき雨天の際フライシートになるよう準備しておく。なお食糧の残り物は必ず土に埋める等してテントを張った型跡を残すべきではない。

b コンロ

大抵の沢なら流木がひろえるのでコンロなしでもまかなえるが、国立公園では流木一本使ってはいけないことになっているし、雨天を考えるならばラジュースやプリムス等の小型を携行すべきである。なお燃料のガソリンも食糧を最短調理時間で済ませるよう工夫して1日1人0.1l以下にする。雨に濡れた木はなかなか燃えないで濡れたところを削り落とす等、落着いて工夫すればコンロが故障したり、なくても道は開けるが、マッチ類は絶対濡らさぬことが大事である。

なお焚火の跡仕末は完全に火を消し燃え残りの焚木は雨のかからない岩かげにまとめ、灰は土に埋めておく等配慮すべきである。

c コッフェルと食器

4人迄は最も小型ので充分であり、且つ中の茶びんは持って行かない。それだけのスペースに各自の食器を詰めたりして最大限空間を

作らないようにする。

食器はバールを各自一枚として他にはアルミ箔の大皿を2枚宛持つてゆけば色々と便利だし又たのしい食事となる。なお、4人に1個は2ℓのボリタンクを是非携行しなければならない。思わぬ高捲きで水の得られぬままビヴァークという事態も発生しやすく、高捲きの前に状況を把握して水を持つことを忘れてはならない。

1-2 登攀用具

a ザイル

ナイロン、ポリプロピレン製で8~9mm×50mが適する。相当な滝のクライミングが連続する沢以外では主として渡渉、トラバースそして懸垂下降に使うが、懸垂下降では8mmザイルでは相当の伸びを考えて下降しないとバランスをくずしてしまう。

人数と沢の程度により1本又は2本携行するが、充分岩登りに自信をもって滝をクライムすれば高捲き時間を省くこともできる。高捲きから下降に移るときはよほど慎重に下降点を定めないと懸垂下降中ザイルが足りなかったり、すぐにまた高捲く破目にになってしまう。ルートファイディングの眼を養うことが重要である。

b 三ツ道具

ハンマーは1パーティに2本とし、トップが打ったハーケンはラストができるだけ抜くべきである。やたらと己のメモリアルとしてハーケンを打ち残すことは落書きと同じで、自分の足跡すら残さない心使いによって次に通るパーティが快適な沢登りができるのだ。

ハーケンについては特殊な沢でない限りユニバーサルや兼用、大小とりまして凡ゆるリストに応用できるよう考え方一つ最小限にすべきである。あくまでも天候と日数とメンバーの技術と時間との相談であり、捲く方が早いような滝に人工登攀を試みるようなことはいけない。カラビナもハーケンと相談のことだが、三ツ道具の重さは大きく全装備の負担となってくる。尚をぶみも積極的な意味でさけ

ておきたい。

c 捨て縄

懸垂下降の支点やセルフビレイの補助ピンとして大いに利用価値があり且つあぶみの代用ともなる。8~11mmのロープを1~2mの長さのシューリングにして、各自2本程度用意して行くべきである。

1-3 その他

a 細引

テントの頃で述べた通り細引は張綱のみならずルックザックを水に浮べて対岸に渡したり、ルックザックを担ついでは渡れない岩棚であっても安全に越すことができたり、沢登り用のルックザックの重さならばこのロープで吊上もできる等、応用次第で重宝なものである。

b カメラ

必須のラジオについて記録用のカメラも大事なものだが、水に濡らせないし、必要なときすぐシャッターを押せないといけないので大型のかさばるもの程扱いにくい。今は中古品でないと入手できない蛇腹のスプリングカメラや鏡胴の薄い広角レンズ専用カメラが最も向いており望遠レンズ等はまったく無用の長物だ。沢を克明にメモリにはカメラをミゾオチより高いところに吊し防水袋に入れてぶらつかないよう肩からバンドに止める等大変厄介なものである。

c ヘッドランプ

沢筋の夜間は殆ど行動できないから、パーティについて1個で充分である。ラジオやローソクを消して焚火を囲んで静かな語らいや渓の流音にじっと自分を省みる等汲めどつきない沢の趣きを大事にしてほしい。

2 個人装備

2-1 行動時に体に付けるもの

「毛のスポーツシャツ、純毛サージのニッカー・ズボン、ナイロン

パンツ、毛のストッキング、帽子、薄手靴下」一日中殆ど濡れっぱなしであるから、これ以上着たとて寒さに変りない。とにかく夏と言え歯が鳴り、胴ぶるいのくる黒部の水だが、特に山頂部に大雪渓を持つ沢は身を切られるほど冷い。神経痛や痔の気があるときはさけなければならない。

さて、これらの着物の着替は必要でない。早立ち早着きを励行しておればその日の暮営地に着いたとき、すぐにしぼり上げれば大抵はテントや夕食の仕度の間に生がわきとなるので寝るときには生理的な悪感を覚えない程度になっている。濡れたものは一番上に着て寝るといい。なお毛のストッキングは行動中水を吸ってズリ落ちやすく又、ブッシュで破れもするから丈夫な布でスネ当てを別に作ることも楽しい沢登りとなるであろう。

2-2 就寝時

「純毛の下着上下、セーター、オーバーズボン、シュラフカバー、エアーマット、中厚手の毛のソックス」夏であれば 3000m 級の稜線上でもこれだけである。荷物の軽量化、小型化と熟睡を考えるときこれより少なくとも多くてもいけない。毎朝 4 時頃には寒さで眼がさめるので便利でもあり、温く眠れたときは雨が近いことが多い。シュラフカバーはせめて純毛のサージでチャック付のを作れば一層快適な生活ができるものと思う。

なお、これらの衣類をはじめルックザックにつめるものは濡れてもいいものを除いて一品一品ビニール袋に入れた上で更に大きな肥料袋に入れた上からバンドでとめて防水は完全なものとしておく。

2-3 はきもの

地下足袋とわらじの併用が良い。前者は土建用の頑丈なもので少し大き目のを買って薄手の靴下を一枚はけば靴ずれ（多くは親指と次の指の間）が防げる。

後者は最近少ないが布とわらと一諸に編んだものならば相当に強いけ

れど普通の市販品は大体一日もてば良い。これが案外かさばるので各自
3足が限度であるから不必要にはくことをさけ、こまめにぬいだりはいた
りしたい。使う前日より水につけておいて強度をましてやる。地下足袋
は体裁が悪いとか滝場の多い沢とて登山靴も持つて行く人もいるが、日
常のクライミングのトレーニングにも地下足袋でやるようすれば登山
靴と違った岩場のこなし方や歩き方が身につくので極力不要な荷となる
ものはもってゆくべきでない。

2-4 ゼルブストザイル

最近のクライマーであれば大抵持っているが沢登りにおいても個人装備として必要なものだ。各人の好みでウェストロープであり安全ベルトであるが、いづれにしてもそれにセルフビレー用ロープ9mm×1mをつけ先端にはカラビナをつけておく。これは渡渉の際、ミドルはこのカラビナをメインロープにかけて渡る為でもあり、渡る際は必ずメインロープの下流側に立つ、トップとなるものは渡渉地点で水深と流速そして足場を勘案していくともアンザイレンできるよう用意してからないと渡渉を軽ろうじて大事を引き起こすことになる。

3 食糧

下表は39年黒部川上之廊下を溯行した折の食糧表である。これだけの分量ではたえず空腹感があるが、といって行動にさしつかえる程ではない。何故なら持っているルックザックが軽いし、重装備の登山での单调さは沢登りではなく、たえず緊張のるつぼに入っているので空腹感も忘れていることが多い。但し昼食のクラッカーはもう少し重みのあるビスケットの方が良い。

とにかくこの程度の重量とかさばりを参考に各人工夫されるとよい。毎日のほんの少しのせいたくが微妙にバランスや体力に負担となるのでよくよく注意されたい。又料理でするべきところはあらかじめすべて行き、ビンやケース入りのものはビニール袋につめかえる等軽量化は充分工夫してほしい。

最近はアルファ米や乾燥野菜が出まわっているから、これを利用する事も多くなっているが夏の食糧としては味けないものである。更に豪華版は岩魚を釣り上げたときであるが食べきれないほど釣ったり、小さな岩魚を殺したりしない節度あるものでありたい。

食糧献立表（1人分）

朝		昼			夕				
A	B	I	II		A	B			
ラーメン タマネギ インゲン豆 紅ショウガ お茶	1.5袋 1/16ヶ 1/4本 紅ショウガ お茶	スパゲティ タマネギ インゲン豆 チーズ ジュース	1.5袋 1/16ヶ 1/4本 少々 5枚	ピスケット (4×5cm) ジャム ジュース	クラッカー 少々 5枚	1/2袋 少々 1.3合 ハム タマネギ インゲン豆 キャベツ葉 I + II = 1日分	(カレー) 米 少々 みそわかめ タマネギ 1/8ヶ 1/2枚 キャベツ葉 マッシュポテト 福神漬 トロロコンブ バター	(ミツナ 野菜いため) 米 少々 みそわかめ タマネギ 1/8ヶ 1/2枚 マヨネーズ バター ふりかけ みりん干 バター	1.3合 少々 少々 1/8ヶ 1/2枚 マヨネーズ バター みりん干 塩こんぶ

朝夕はA B 食隔日に食べる。この他コーヒー、紅茶、砂糖、塩、あめ、菓子少々を持参した。

4 ルックザック

以上で述べてきた装備と食糧を7～8日分携行しなければ例えば黒部の大きな支流はこなせないから、それらのものをまとめて入れるルックザックはその大きさと型状が大事である。

渡渉、トラバース、高捲き、懸垂下降と身軽に行動できることが沢登りに欠かせない条件であればキスリング状のものは不適なものとなる。私達は既に10年も前より技研ザックの名称の下にテント屋に作ってもらい、現在の技研ザックは3代目であり、市販のものにもそっくりなものが多く出まわっている。それ故あえてその材質や寸法等について説明はしないが、

装備とは個性的なものであって各人の工夫によって如何よりも多様性をもつものである。

市販されているものは全て研究もされた上での製品ではあろうがそれのみに満足していっては装備を生かして使う態度も育たず、個性的な山登りや沢登りを企画し樂むこともできないでしまうことになりかねない。山登りとは先人の足跡を見つめつつも自分流の登り方で自分の道を切り拓いてこそ意義あるものと思う。個性的な装備を身につけている人こそ眞の登山を知る人である。

2 スノーホウル考察

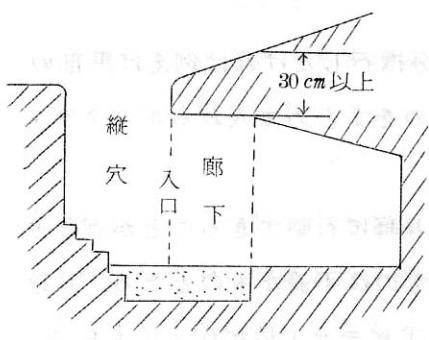
四方立夫

1970年春は、スノーホウル（雪洞）による縦走形式で、黒部横断を試みた。結果は計画があまかった上に、悪天候に見舞われ、前代未開の敗退となつたが、今後の雪洞山行に於ける一つの展望だけは、持ち帰った。

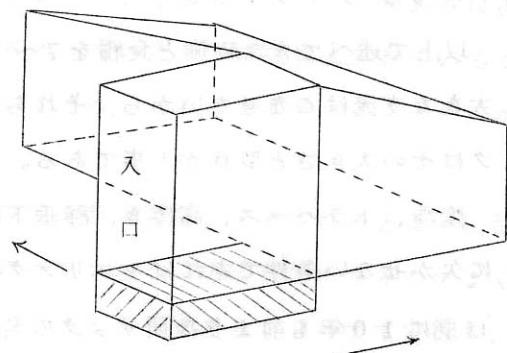
テント山行中に暇に明かして雪洞を堀り、仮泊するのとは違つた多くの経験を得て來たので、以下箇条書にその留意点をまとめてみた。

I テントとの比較

A 図



B 図



矢印の方向に天井をさげる